痴漢冤罪

プロローグ

　夜空を照らす高層ビルの屋上には、冷たい風が吹きつけていた。
　そこに、その少女はいた。
　気品の感じられる上品な身なりで、屋上の柵から、真下の通りを眺めていた。
　今まで何時間も、いや何日も泣いていたのだろうか。少女の目は赤かった。
　少女はおもむろに、柵を上り始めた。ぎこちない手つきながら、なんとかして柵を越えることができた。
　柵の外側、数センチの足場。後ろに回したか細い指が、柵をつかんでいた。
　手を伸ばせば届きそうな死。
　少女は再び眼下を見下ろした。
　都会とはいえ深夜。人通りはないようだった。
　少女は夜空を眺めた。それがあまりにきれいだったから、少女は泣きたくなった。
　だが、
「もう悲しむのはごめん」
　少女は意を決し、柵から手を放した。

　龍哉は辺りを見回した。――見馴れた自分の部屋。
「……夢か」
　目覚まし時計に目をやった。起床時刻には早いが、二度寝する気にもなれなかった。
　龍哉は夢を見ていた。夢の中の少女は、龍哉と同じ学校の生徒だった。
　結ノ宮(ゆいのみや)桃子(ももこ)。財界の重鎮である父親と、有力国会議員の母親との間に生まれた一人娘で、資産総額数兆円とも言われる結ノ宮財閥の次期総裁。三千坪を超える土地に建てられた、結ノ宮邸と呼ばれる豪華な洋館に住んでいるため、同じく資産家の娘の緋芽子に比べ、見た目の金持ち度は高い。
　緋芽子は知らないが、去年龍哉と同じクラスになったのをきっかけに、龍哉とつき合っていたことがあった。
「まさかとは思うが」龍哉はベッドから起き、着替えを始めた。「正夢なんてそうそうあるとは思えないが、虫の知らせということもあるしな」
　着替えを済ませた龍哉は居間に行った。朝早いせいか、まだ誰もいなかった。
　朝食を終え、制服に着替える。いつもより一時間ほど早いが、龍哉は桃子がいつも早めに登校し、図書室で本を読んでいることを知っていた。
　玄関に向かう途中で、龍哉は起きてきた緋芽子に出会った。
「ん、お兄ちゃん、もう行くの？」
　片目を擦りながら言う緋芽子。
　ちなみに龍哉は、本来は兄ではなく弟である。だが誕生日がたった二日しか違わないため、緋芽子が「その方がしっくりくるから」という理由で、勝手に兄ということに決めてしまったのである。
「ああ。所用があってな」
「お父さんの見送りどうするの？」
「今日は緋芽子一人で適切にやっておいてくれ。じゃ」
　手を振って、家を出る。父親の迎えの車はまだ来ていなかった。
　いつもより人影の少ない学校への坂道を早足で歩く。

　校門をくぐった龍哉は、真っ先に裏の駐車場へ向かった。桃子は毎日リムジンで送迎されているため、車があれば、彼女が今日登校していることが分かるからだ。
　探すまでもなかった。十数台と並ぶ乗用車の中、一際人目を引く白銀のリムジンがあった。
「よかった」
　ひとまず胸を撫で下ろす龍哉。
　腕時計に目をやると、ホームルームにはまだだいぶ時間がある。教室に行っても手持ちぶさたなので、龍哉は久しぶりに彼女に会いに、図書室に行くことにした。

　図書室に入る。朝早いせいか、人気は感じられない。
　いつも桃子が好んで座る、奥の本棚に隠れた席に向かう。

　整った目鼻立ちに、窓から差し入る朝日に映える金色の髪。白い細長い指が、ページをめくりかけていた。
　小さな身体とは不釣り合いな、圧倒的な存在感。一国の総理大臣をも操る高級官僚の息子である龍哉でさえ、声をかけるのを忘れ、その美貌に見入っていた。
　不意に、龍哉に気づいた桃子の大きな青い瞳が、龍哉をとらえる。
「よう」
　龍哉が手を挙げる。
　桃子は立ち上がり、一礼した。
「お久しぶりです。如月君」
「ああ、久しぶりだな」
「どうされたのですか。こんな時間に来られるなんて、珍しい」
「久しぶりに桃子の顔が見たくなってな」
　それを聞いた桃子はくすりと笑った。

　龍哉が桃子の隣の席に座り、桃子も着席した。
「何を読んでるんだ？」
　読んでいた分厚い本の表紙を龍哉に見せた桃子。
「『シルベストル・ボナールの罪』、フランスの小説です」
　桃子は両親の仕事の都合により、幼少期をフランスで過ごしていたと、去年、龍哉に話していた。幼かったため当時の記憶はあまり鮮明ではなかったが、帰国後もフランス語の勉強を続けたため、現在では読み書き・会話は不自由なくこなせるという。
「なるほど。仏文を読めるというのは便利だな」
　それを聞いた桃子は神妙な面持ちをした。
「はい。ですが、本当は英語もできないと……でも私、英語はできなくて……」
　桃子は英語が不得意だった。長年フランス語の学習に力を入れていたため、英語は疎かになっていた。英文をフランス語風の発音で読む奇妙な読み方が、しばしば英語圏帰りの帰国子女たちの笑いの的になっていた。
　クラスの人気者である英語圏からの帰国子女たちとの反目を避けて、桃子は毎日、始業時間ぎりぎりまで独り図書室にいるようになったのだった。
「英語なんて自分が話さなくても、誰かが自分以上に上手く話す。なにも面白がってやることはないんじゃないか」龍哉が言った。「ましてや高家の才媛たる桃子が、一時の流行に振り回される姿など見たくはない」
「ええ、龍哉君はそうおっしゃってくださいます。でも、龍哉君は私より英語ができて、うらやましいです」
「流行に囚われているのか英米に追従しているのか知らないが、官僚になるための試験の科目に英語が入ってしまったから、仕方なくやっているだけだ。最低限の実力があればいいとしか考えていない」

　桃子は少し安心したように、
「そうですね。あまり気にしないことにします」
「ああ。日本の大学ならフランス語でも入れるから、実質的な不利益はそれほどないはずだ」
　桃子はふと思い出したように、
「――そういえば、お姉さんとはうまくいっていますか」
「よく知ってるな、如月家が養女をとったこと。まだ桃子には伝えてなかったと思うが」
「緋芽子さんといえば、かの有名な資産家の娘。噂にならないはずがありませんよ」
「そうか。うまくいっている」
「それはよかったです。私も一人っ子ですが、きょうだいができるって楽しそうです」
「ああ、家が活気づいた感じがするな。ところで、緋芽子はうちに、自動車を持ってきた」
「……車を、ですか？」
「ああ。もともと緋芽子の両親が所有していたもので、緋芽子のマンションの地下駐車場に停留されていたんだが、マンションを出るに当たって、うちの裏庭まで持ってきたわけだ」
「それはそれは、大きな手みやげですね」ほほ笑む桃子。
　龍哉が続けた。
「父の通勤は公用車だから、自家用車は必要ないんだ。初めは処分も検討したが、緋芽子によればかなりの高級車ということらしいし、前の両親との想い出もあるそうなので、当分は置いておくことにした」
「何という車ですか？」
　桃子が興味を持つのも無理はなかった。彼女の父の財閥は、国内のある大手自動車会社を傘下に収めていたからだ。
「ランボルギーニ・カウンタックだそうだ。――知ってるか？」
「ええ。イタリア製の高級自動車です。生産は二十年くらい前に終了していますが、中古でも数千万円の値がつくと言われています」
「そんなにか」龍哉が驚いて言った。「ちなみに、うちにあるのは特注品らしく、四人乗りなんだ。普通のは二人乗りだそうだが」
「それは珍しいですね。旧浅水家も当時は羽振りがよかったのでしょう。ランボルギーニ・カウンタック自体は、最高時速が三百キロ近い、自家用車としてはあまり実用的でない車ですよ。それを四人乗りで作ってもらうなんて、かなりの費用でしょうね」
「そういう家庭で育ったせいか、緋芽子は相変わらず金持ち気質が抜けない」
「それは弱りましたね」
　口元をほころばせる緋芽子。
　龍哉が言った。
「――ところで桃子。最近、何か変わったことはなかったか？」
　桃子の普段通りの姿が確認されたとはいえ、やはり今朝見た夢が気にかかっていた龍哉。
　その問いに、桃子はきょとんとした。口元に人差し指を当て、考えること数秒。
「……とくに、ありませんけど？　家の花壇の花が咲いたくらいです」

「そうか。それはよかった」
　去年、桃子の家に遊びに行ったことのある龍哉は、結ノ宮家の敷地を取り巻くように作られた広大な花壇に、桃子が独りで植えた白いクロッカスの花が咲いていたことを思い出した。
「あ、でも」桃子が言った。「新しい彼氏ができたんです」
　予想外の返答に驚きつつ、龍哉が言った。
「ほう。誰だ？」
　桃子の身の安全とは無関係でも、去年桃子とつき合いのあった龍哉にとっては多少なりとも気になる話だった。
「ご存じでないかもしれませんが、D組の竹内君という方です。半年ほど前、食堂で相席したのをきっかけに、お付き合いするようになりました」
「どういう家柄なんだ？」
　龍哉はてっきり、桃子とつき合うその竹内という人物が、どこかの一流企業の社長か高級官僚の息子だと思っていた。
　だが桃子の答えは、龍哉の予想に反するものだった。
「とくに名のある家の出というわけでもないです。平凡なサラリーマンと専業主婦との間に生まれたそうです」
　龍哉は驚いて、
「ご両親は許しているのか？」
「いいえ」桃子は首を振った。「一度家にお招きしようと思い、父に話したところ、歓迎できないと断られてしまいました」
　そりゃそうだろうと龍哉は思った。全国規模で影響力を持つ大財閥の総裁が、自分の娘と一庶民との交際を快く思うはずがないと。
「確かに竹内君は貧しい家の生まれです。彼の生い立ちからすれば、この学校に入るまでの道程は、とてつもなく険しいものだったでしょう」桃子が続けた。「でも私が好きなのは彼自身です。そこには社会的身分も門地もありません」
「だが人柄や性格を、その人の家柄と分離されたものとして考えることは不可能だろ」
「それはそうです。緋芽子嬢がそうであるように、生まれは、その人の人生観を決定づける重大な要因です。ですが仮に『衣食足りて礼節を知る』という諺を例にとれば、これは豊かな者が礼節を弁えていることを意味するにとどまり、必ずしも貧しい者が礼節を弁えていないということを意味するものではありません」
「論理的にはそうだが……」
「ですから私は、両親になんと言われようと、彼との交際をやめるつもりはないのです」
　去年一年間のつき合いで桃子の性格をよく知っていた龍哉は、桃子の両親が今後この問題で手を焼くだろうと、人ごとながら同情した。
「それに結婚とは本来、地位と地位がするものではなく、人と人とがするものだと思うのです。私は彼の社会的地位とは無関係に、一人の人間として彼を愛しているのです」
　龍哉が呆れて、

「ロミオとジュリエットか。そういうのは時代遅れだ」
　それを聞いた桃子はほほ笑んで言った。
「あらあら。一時の流行に流されるのはよくないとおっしゃったのはどなたかしら」
　龍哉はきまり悪そうな顔をした。
「差し出がましいことを言った。俺が桃子の交友関係に口を挟むべきじゃないな」
　龍哉は、まだ自分が桃子への思いを断ち切れていないことに気づいた。
　去年、二人が別れたのは、龍哉の思いが緋芽子になびいていると感じた桃子が、別れ話を切り出したためだった。
　だが緋芽子が如月家の長女となった今、龍哉の気持ちが再び桃子に向かない理由はなかった。
「いえいえ。差し出がましいなどとはまったく」桃子が笑った。「そのようにおっしゃるのも、龍哉君が私のことを気にかけてくださっているからこそです。本当の友達でなければ、そのような立ち入った助言はしないでしょう」
　桃子は特に意識して言ったわけではなかったが、その友達という言葉に龍哉は胸が痛んだ。一年前は恋人、今は友達。その落差と、桃子を他に奪われた現実が、龍哉の心を苦しめていた。
　時計を見る。八時半。
　その思いを断ち切るように、龍哉は席を立った。「そろそろ始業時間だ。じゃあな」
「はい。またお会いしましょう」
　桃子も立ち上がり、頭を下げる。
　そのとき突然、大きな声が聞こえた。「あー、いたいた」
　振り向く二人。二人に向かってくる一人の少女がいた。
　厚化粧にミニスカート。桃子とは対照的な外見を持つその少女は、桃子を指さして言った。「あんた、結ノ宮桃子よね？」
　突然現れた謎の少女に指を突き出され、目を丸くする桃子。
「答えなさいよ」少女が詰め寄る。
　龍哉が言った。
「そういうあんたは何者なんだ？」
「あんたには関係ないでしょう」
「名乗るほどの名前は持っていないか？」
「むっ」龍哉を睨む少女。「そんなに知りたければ教えてあげるわ」
　言って少女は、龍哉にびしっと指を突きつけた。
「ふふ、聞いて驚くんじゃないわよ」
　少女は龍哉を、桃子を順に見た。そして一呼吸置いてから、
「なにを隠そう、私は日本の財界をリードする最強財閥、東亜グループ総裁の娘、東亜千畝(ちうね)よ！」
　どうだまいったか！　と言わんばかりに言い放つ千畝。
　しんと静まりかえる室内。
　龍哉はその財閥とやらの名前を聞いたことがなかった。

　龍哉は桃子に耳打ちした。「知ってるか？」
　桃子は首を振った。
　それを見ていた千畝が言った。
「何よ、この世間知らず。このっ」
　千畝は近くにあった椅子を蹴った。だが存外に痛かったらしく、顔をしかめた。
　呆れる龍哉と桃子。
　大丈夫かこいつ、と思った龍哉。
「ま、まあいいわ」顔をしかめたまま千畝が続けた。「クラスの女子に聞いたわよ。結ノ宮桃子、あんた、クラスにとけ込めないから毎日ここに引きこもってるんだってね」
　それを聞いた桃子の顔が険しくなる。
「それが、何か？」
「この私が今日、わざわざこんなところまでご足労したのは他でもないわ。竹内と別れてほしいのよ。今日中にでも」
「えーー？」
　少女の突然の突拍子もない要求に、言葉を詰まらせる桃子。
「しらばっくれてもだめよ。私から彼を奪ったのはあんたでしょう？　最近、急に冷たくなったかと思えば、あんたがそそのかしてたなんてね」
「そんな、そそのかしたなんて……」
「違うわ！」少女が声を荒げた。「私と竹内はずっとつき合ってたのよ。なのにあんたが自分の財産ちらつかせて、彼を奪ったんじゃない！」
　言って、桃子につかみがかろうとする千畝。龍哉がすんでのところで間に入った。
「邪魔しないでよ！」
　千畝が龍哉を睨みつけた。
「何だか知らないが、落ち着け」
　それを聞いた、千畝は大きく溜息をついて見せた。
「落ち着けですって？　この女に金で彼氏を奪われたのよ？」
　龍哉の後ろの桃子を指さす千畝。
　桃子は龍哉の横に出てきた。龍哉にさがるよう目くばせした。
「私は、竹内君があなたとつき合っていたとは知りませんでした」桃子が言った。「ですが、彼に私の財産をちらつかせ、あなたと別れるよう勧めたなどと言うことはありません」
「聞き苦しい言い訳ね。竹内と私は愛し合っていたのよ。そんな彼が急に私に見向きもしなくなる理由なんて、それくらいしか考えられないじゃない」
　桃子は首を振った。
「竹内君があなたに見向きしなくなったのは、竹内君のあなたに対する愛が薄れたからではないでしょうか」
「そんなことありえないわ。今はあんたに心を奪われているだけで、本当は今も竹内は私が好きなのよ。だからあなたは手を引きなさい」

　きっと桃子を睨みつける千畝。
「お断りします」桃子がきっぱりとした口調で言った。
　龍哉は桃子の性格を知っているだけに、彼女の決意は決して揺らがないだろうと思った。
「あなたが本当に彼を愛しているのなら、実力で取り戻すべきだ」桃子が言った。「ましてやあなたが本当に名誉ある財閥の娘であるのなら、なおさらそうすべきだ」
　千畝は悔しそうに唇を噛み、続けて笑みを浮かべて言った。
「ふっ、覚えてなさい。きっと後悔するから」
　千畝は踵を返し、その場から去っていった。

　事件が起こったのは、その日の夜だった。
　八時ごろ、龍哉が部屋で宿題をしていると、下の階から階段を上る足音が聞こえてきた。続けてノックの音。
「お兄ちゃん、結ノ宮って人から電話ぁー」
　ドア越しに聞こえる緋芽子の声。
「わかった。今行く」
　龍哉はペンを置いた。
　三階から一階まで降り、廊下で電話をとろうとすると、緋芽子が物陰からこちらを見ていることに気づいた。
「……何だ？」
　保留を解除するボタンを押す前に、龍哉が言った。
「い、いや。なんでもないよ」
　そう言って緋芽子はいそいそと階段を上がっていった。
――なんなんだ、あいつは。
　そう思いながら、龍哉は保留ボタンを押した。
「もしもし。如月です」
「た、龍哉君？　大変なことが起こったんです」
　受話器越しにもわかるほど、切迫した声だった。
「どうした？」
「……それが、竹内君が痴漢で逮捕されてしまったんです。被害者は、東亜千畝だそうです」
「なっ……」
　桃子が続けた。
「放課後、帰りの電車で痴漢をしたとして、あの千畝とかいう人が竹内君を駅員に突き出したそうなんです」
「竹内と連絡は？」
「いま面会してきたところです。時間の制約上あまり話せなかったのですが、竹内君によれば、千畝はいつも車通学です。それなのに今日の放課後だけは、竹内君と同じ電車に乗ってたんです。家とは逆方向なのに」
「そりゃ怪しすぎるだろ」
「竹内君が言うには今日の放課後、千畝がやってきて、私と別れるように迫ったんです。でも竹内君は逆に、千畝との別れ話を切り出して――」
「それで痴漢に仕立て上げたってわけか」
「その可能性が高いです」
「竹内は否認してるのか？」
「はい。でもだいぶ疲れているようでした。気が滅入っていて、ぐったりしてました」
「だろうな」
「私、終わるまで待とうと思ってるんですけど、いつになったら帰してもらえるんですか？」

「自白すればすぐだが、否認を通せば二十三日後だな」
「そ、そんなに…？」桃子は息を飲んだ。
「逮捕から検察官送致までが四十八時間。検察官取り調べが二十四時間。勾留取り調べが延長を含め二十日。計二十三日間だ。常人じゃまずもたない」
「お願いです、龍哉君。竹内君を助けてください。竹内君を釈放させてください。このままじゃ竹内君、痴漢にされてしまいます……」
　電話越しに、桃子のすすり泣く声が聞こえた。
　龍哉が高級警察官僚の息子だと知っての頼みだった。
「わかった。前向きに善処しよう」龍哉が言った。「一旦、切るぞ？　そっちは公衆電話か？」
「車内電話です。番号は……」
　龍哉は桃子の告げる番号を書き取り、受話器を下ろした。続いて霞が関の某庁に電話をかけ、受付に父親の内線番号を伝えた。
――会議とかに出てなければいいけどな……
　廊下の時計を見ながら、待つこと五、六分。電話に出た父親に事情を説明し、容疑者を釈放するよう指示を出してほしいと頼んだ。
　だが父親は、捜査の違法性が明らかならまだしも、末端の個別の捜査には口が出せないと言った。
「どうしてだよ…？　緋芽子のときみたいに、なんとかならないのか？」
　緋芽子が如月家の一員になる前、龍哉は雪山で遭難した緋芽子を父親の助けを借りて助け出したことがった。それをきっかけに、両親のいない緋芽子は如月家の養子になったのだった。
「結ノ宮財閥の娘の愛人を救うことに、何の利益があるというんだ？　緋芽子を救ったのは、それなりの見返りが期待できたからだ。現に緋芽子はお前の働きかけで養子になり、旧浅水家の莫大な遺産を得ることができた」
「利益なら十分あるだろ。桃子は将来、確実に結ノ宮財閥の総裁の座を継ぐ。官界と財界は切っても切れない縁だ。今から良好な関係を築いておけば、お互いにとって有益なはずだ」
「お前の言う良好な関係に、結婚は含まれないのか？」
「なっ…」
　龍哉は一瞬、言葉を失った。
　父親が続けた。
「私がなぜお前と緋芽子を結婚させなかったか、分からないか？」
　龍哉は何も言わず、父親が続きを話すのを待っていた。
「緋芽子は財産はあるが、地位は失った。一方、桃子には両方がある。選ぶならどちらか、明白だろう」
「俺に、政略結婚しろと？」
「不満か？」
「桃子は今の彼氏が好きなんだ。それに桃子は混乱に乗じれば落とせるほど甘くないんだ。――もういい。仕事中、悪かったな」

　龍哉は乱暴に受話器を置いた。
――彼氏が逮捕されたのをいいことに、自分が彼氏になるなんてなんてできるわけないだろ。
　一呼吸おいてから、桃子にかけ直した。呼び出し音が一回鳴り終わるが早いか、桃子が出た。
「龍哉君？　どうでしたか？」息を弾ませる桃子。
　それとは対照的に、龍哉の言葉は冷たかった。
「無理だ」
「ど、どうしてですか」桃子が声を上げた。「龍哉君のお父様は、警察庁の幹部職員ではありませんか」
「いくら幹部でもな、末端の個別の捜査に口は挟めないんだ」
「そんな……このままじゃ竹内君、痴漢で退学にされてしまいます……」
　電話越しに聞こえる桃子の泣き声。
　龍哉の通う中学校は、社会的に地位ある者の子女が多くを占めることで有名な私立中学校だ。生徒が痴漢で逮捕されれば退学に処されることは、容易に想像できた。
「落ち着け。まだ有罪と決まったわけじゃない」龍哉が言った。「ところで弁護士はついてるのか？」
「いいえ、まだのようです。竹内君、両親に負担をかけたくないからと、呼ぶのをためらってました」
「それはまずい。痴漢冤罪に強いやり手の私選弁護士をつけてやるんだ。費用ぐらい、桃子の小遣いで何とかなるだろ」
「そ、そうですね。早速手配します」
「それと、できるだけ面会して励ましてやるんだ。逃げ場のない取り調べは、精神的にも肉体的にもかなりの負担だからな」
「わかりました」
「何かあったら連絡してくれ。健闘を祈ってる」
「はい」
　龍哉は受話器を置いた。ふと廊下の奥の方に目をやると、物陰からこちらを眺めていた緋芽子と目があった。
　緋芽子に近づいて言った。
「聞いてたのか？」
　こくんと頷く緋芽子。
「どこから？」
「お父さんに電話したときから」
　心なしか緋芽子の表情は暗いように龍哉には思われた。
「そうか」
　龍哉は緋芽子の頭に手をやり、髪をなでてやった。緋芽子の表情は暗いままだった。
「ねえ。龍哉が私を如月家の養子にしたのって、財産のため？」
　いつになく神妙な面持ち。いつもの明るい緋芽子からは想像もできないほど。

「まさか」龍哉は首を振った。「姫が好きで、一緒に暮らしたいから、養子にしてもらうよう頼んだんだ。そこに、誰の意向も差し金ない」
「でも、さっきお父さんは……」
「父親にも父親なりの考えがあるんだろ。だが姫の通帳や証書の類は、今でも姫に管理させてる。少なくとも俺が財産目的でないことは確かだろ」
　龍哉はもう一度、緋芽子の頭をなでてやった。緋芽子の表情が和らいだように思われた。
　その夜、龍哉と緋芽子はお茶をした。ここのところ二人とも忙しかったから、面と向かって茶菓子を食べながら、談笑するのは久しぶりのことだった。
　本来なら心から楽しめたはずの、二人水入らずの時間。だが龍哉の心には、桃子の一件が重く影を落としていた。

翌日の昼休み、龍哉は桃子の教室を訪れた。朝、図書室に桃子の姿がなかったので、様子を見に来たのだった。
入り口に立って教室の中を覗く。桃子の姿は確認できなかった。
教室後ろの窓際に、女子生徒たちが集まって話をしていた。ひょっとしたらその陰なっているのかもしれないと、中に足を踏み入れた。
近づいてみたが、桃子の姿はなかった。
自分の教室に戻ろうと、龍哉がそこを離れようとしたとき、
「ねーねー、昨日、うちの学校の生徒が痴漢に遭ったって知ってる？」
人混みの中にいた女子生徒が口火を切った。
思わず龍哉は足を止めた。
「知ってるー。かわいそうだよねー」別の生徒が言った。
「しかも、犯人はうちの学校の生徒らしいわよ」
「えーっ、うっそー。こわー」
「D組の竹内ってやつがやったんだって。掲示板に出てたわ」
「竹内って言えば、結ノ宮の彼氏じゃない」
「うわー。痴漢とつき合ってたなんてやらしー」
「さすがあの変わり者のことだけのことはあるわねー」
「結ノ宮って友達いないし、変人だと思ってたら、やっぱりそうだったんだ」
「ほんとよねー。いつも気取ってばかりいるし、大金持ちだからっていい気になるなっての」
異口同音に、桃子の悪口を言い合う一団。
龍哉は割って入り、真ん中にあった机を叩いた。大きな音し、女子生徒たちの視線が龍哉に集まった。
「桃子の侮辱は許さない」
龍哉が言った。
「誰よ、こいつ？」一人の女子生徒が龍哉を睨んで言った。
「私、知ってるー」机に座っていた別の女子生徒が、勢いよく手を挙げた。「F組の如月龍哉君」
「えっ、如月龍哉って、あのーー」
「そう。全国模試で常に上位五名に入ってる、あの如月龍哉。警察官僚の息子で、この前、浅水さんの弟になったの」
そう立て続けに話す女子生徒。
ーー詳しいな……
「でも頭も器量もいいのに、どうして結ノ宮なんかとつき合ってたのか不思議なのよねー」
「えっ、結ノ宮とつき合ってたの？」
「そうよ。あいつの元カレだもの」
「うわーっ、趣味わるー」
「でもまあ私ファンだし、この際、サインもらっておこうかな」
言って、女子生徒は机から降り、とことこ龍哉の前に歩いてきた。そして手帳を取り出して、

「ーーあの、サイン」
「ふざけてる場合か」龍哉は手帳を突き返した。
「うわーん」
　そう嘆きながら、女子生徒は元いたところに戻っていった。
　別の女子生徒が、その肩をさすりながら言った。
「まあこんなもんでしょ。あの結ノ宮とつき合ってたくらいなんだし。よしよし」
　他の女子生徒が龍哉に言った。
「どうして結ノ宮なんかの肩を持つの？　痴漢の彼女なのよ」
「まだ有罪と決まったわけじゃない。そう決めつけるのは、時期尚早だ」龍哉が言った。
「悪いことしたから捕まったんでしょ」
「そうとは言えないだろ」
「でも容疑者って、裁判で必ず有罪になるじゃない。ということは捕まった時点で犯人も同然じゃない」
「刑事裁判における有罪率が99.86%という異常な値をとることが、捜査が適法になされていないことの何よりの証拠だ。今回も冤罪の可能性は払底できない」
「えーっ、如月龍哉君ったら、痴漢を擁護するの!?」今まで肩をさすられていた女子生徒が声を上げた。
「おい、誰がそんなーー」
「憧れの如月君が痴漢容認論者だったなんて、超ショック……イメージ壊れちゃった。うわーん」
　がっくりと肩を落とし、涙する女子生徒。別の生徒が慰めようと、その肩をたたいてやっていた。
　いたたまれなくなった龍哉は、何も言わずにその場を後にした。

　夕方、家に帰った龍哉は、録音のあることを示す留守番電話のランプが点灯していることに気づいた。
　すぐに靴を脱いで廊下に上がり、再生ボタンを押した。
「如月さんのお宅ですか」
　聞き慣れた桃子の声だった。
「結ノ宮桃子です。龍哉君、電話下さい」
　その録音はそこで切れていた。
　続いて、二件目の録音が再生された。
「桃子です。龍哉君、気がついたらすぐに電話下さい。お願いします」
　その桃子の様子から、一刻の猶予も許さない事態が起きたのだと龍哉は思った。
　録音はそれで全てかと思いきや、三件目の録音が再生された。
「龍哉、念のため知らせておくが、所轄署からの連絡によれば、竹内が犯行を認めたとのことだ」
　父親の声。
――なんてこった。
　龍哉はすぐに受話器をとり、桃子の家の電話番号を押した。
　数回、呼び出し音が鳴った後、
「はい。結ノ宮邸です」
　女中が出た。
「中学校の友達の如月です。桃子にかわってください」
「少々お待ち下さい」
　しばらく待たされた後、
「桃子嬢はただいま外出中でございます」
「どれくらい前に出ましたか」
「一時間ほど前だそうです」
「行き先は？」
「なんでも、告げて行かなかったとのことです。車で行かれたそうなので、おそらく遠方と思われますが」
「そうですか。失礼します」龍哉は受話器を置いた。
　そこはかとない不安が感じられ、すぐに桃子が乗っていると思われるリムジンの車内電話にかけ直した。
　呼び出し音は鳴るが、応答はなかった。鳴り続ける呼び出し音が、龍哉の不安を一層かき立てていた。
　桃子が電話に出られなかったのも無理はなかった。彼女はこのとき、千畝と対面していたのだった。

　――三時間前。

　竹内につけた弁護士との話し合いを終え、帰宅した桃子が食堂で紅茶を飲んでいると、女中が来て言った。
「お嬢様、東亜千畝という方からお電話でございますが、どうなさいますか？」
「千畝から？」
　桃子は、持っていたカップを落としそうになった。この期に及んで千畝から連絡があるとは思っていなかったし、電話番号を知らないはずの千畝から電話が来たことも驚きだった。紅茶も飲み終えないまま、電話に急いだ。
　電話に出ると、意地悪そうな千畝の声が聞こえてきた。
「竹内が自白したそうよ」
　続いて、勝ち誇ったような笑い声。
　桃子は視界が暗転し、倒れそうになった。壁に手をついて、身体を支えた。
「いろいろと動き回ってたって聞いたけど、結局あんたには何もできなかったわね」
　桃子は何も言えなかった。
「だけどものは相談よ。今から提示する条件をのめば、被害届を取り下げてやらないこともないのよ」
「何ですか？」
「竹内と別れることと、私に謝り、一億円の慰謝料を払うこと」
「一一一億円!?」
　桃子が声を上げた。
「あら、大切な彼のことを思えば大した額じゃないでしょ？　あんた、聞くところによれば、かなりの金持ちなんだってね。弁護士費用だって自分の懐から出したそうね」
「なっ、どうしてそれを？」
「うるさいわね。質問してるのは私よ。たった一億円で彼の人生が救えると思えば安いもんでしょ。さあ、条件をのむ？　彼を見捨てる？」
「……えっと」
　桃子は返答に窮した。提示された慰謝料は、桃子の自己資産を上回っていた。支払うなら足りない分は父親にもらわなければならないが、竹内のことを快く思っていない父親の首を縦に振らせるなど不可能に近かった。
　またたとえ慰謝料を支払ったとしても、千畝が被害届を取り下げる保証はなかった。さらなる金銭を要求される可能性も考えられた。
　考えを巡らせる桃子に、しびれを切らせた千畝が言った。
「早くしないと、この話はなかったことにするわよ」
「待ってください」桃子が言った。「条件をのみます」
　電話口から、千畝の勝ち誇ったような笑い声が聞こえてきた。桃子は唇を噛み、それに耐えていた。
「それじゃ慰謝料の支払いについて話すわ」
　千畝が指定した支払い方法は、現金での一括払いだった。日時は今日の夕方四時。場所は、隣

町にある港の倉庫の前だった。
「倉庫の前などを利用して、邪魔になりませんか？」桃子が言った。
　桃子はこの状況下にありながら、他人を気遣うことを忘れなかった。
「大丈夫。夕方はほとんど人気がなくなるから」
「そうですか。ですが、急にはそんな大金、用意でき――」
「何言ってるのよ。善は急げっていうじゃない。心変わりしないうちに払ってほしいのよ。絶対、遅れずに来なさいよ。一秒でも遅れたら、この話はなかったことにするから。じゃ」
　そう釘を刺して、千畝は電話を切った。
「あの、ところでどうして私の電話ば――」
　受話器からは、ツーツーという音。桃子の声は届かなかった。
　桃子は受話器を置き、龍哉の家の番号を押した。
――龍哉君、いてくれるといいけど……
　呼び出し音が鳴った。
　桃子は掛け時計を見た。時刻は午後一時。まだ帰宅していない可能性が高いと思われた。
　案の定、留守番電話の自動応答メッセージが流れてきた。桃子は折り返し電話するよう伝言を入れた。

　机の上にある七つの預金通帳を前に、桃子は途方に暮れていた。それらに記載された全ての金額を足し合わせても、千畝から要求された金額には届かない。
　事前に銀行に連絡を入れていないので、今から預金の全額を引き出すことさえ叶わないと思われた。
　それでも桃子は、銀行に相談の電話をかけてみた。取引銀行のうち、国内にある六行に問い合わせた結果、今日中に引き出せるのは六行合計でも二千万円程度にしかならなかった。
　受話器を下ろした桃子は、溜息をついた。
　かなり狼狽しているように見えたのだろうか。偶然、近くを通りかかった女中の千鶴が桃子に声をかけた。
「あれ、お嬢様、どうされたのですか？」
　金額をメモした紙をポケットにしまい、桃子は首を振った。「いいえ、なんでもありません」
「そうですか……」千鶴は不思議そうに桃子の顔を見つめて言った。「ですが、何か困り事がありましたら、何でもおっしゃってくださいね」
「ええ、お気遣いありがとう、千鶴」
　いくら彼女が気心の知れた女中だとはいえ、大金のことを話してもしかたなかった。
　千鶴は桃子より三歳年上。今から三年ほど前、屋敷で家事を行う女中として雇われたが、桃子と気が合うため、去年から桃子の身辺の世話をする役割を担っている。
　桃子はその場を立ち去り、部屋に戻った。
　深呼吸をして、気を落ち着かせる。

――今から千畝に電話して、支払いを延期してくれるよう頼もうか……
　そう考える桃子の脳裏を、千畝の言葉が過(よ)ぎった。
「絶対、遅れずに来なさいよ。一秒でも遅れたら、この話はなかったことにするから」
――だめだ。きっとわかってくれない。それに私、千畝の電話番号を知らないじゃない。一度も同じクラスになったことがないのに、どうして千畝は私のを知ってたんだろう？
　しばらく考えてみたが、答えは出なかった。
　ふと時計に目をやった。千畝に指定された時刻は、刻一刻と迫っていた。
――どうしよう。今から銀行を回って引き出せる分だけ引き出して、残りの支払いは待ってもらおうか。でも、たとえ後に残りを支払ったとしても、今後さらにお金を要求されるおそれもあるし……
　頭を抱える桃子。
――竹内君が男で千畝が女である限り、私がお金を払っても根本的な解決にはならない。たとえ千畝が一旦は被害届を取り下げたとしても、後にまた痴漢冤罪をでっちあげる可能性はある。私は竹内君の今だけじゃなく、未来まで守らないといけない。そして私には、結ノ宮家の跡継ぎとして、当家の財産を守る義務がある。
　そう考えた結果、桃子はある決心をした。
　千鶴を呼び、内緒で物置からアタッシェケースと古新聞を持ってくるよう命じた。
　千鶴がそれらを持ってくると、二人で古新聞をこれでもかというほどアタッシェケースに詰め込んだ。
　古新聞を貯え、適度に重量が増したアタッシェケース。
　桃子は千鶴に、おかかえの運転手に車の用意をさせるよう言った。
　外出の支度をし、アタッシェケースを提げて部屋を出た。玄関に向かう途中、すれ違った他の女中が「どちらへ？」と訊いたが、「今晩は遅くなると父上にお伝えください」とだけ答えて屋敷を出た。
　支払場所に向かう向かうリムジンの中、桃子は龍哉の家に電話をかけた。留守番電話だった。
――早く、早く龍哉君と連絡が取れますように。
　桃子はそう祈っていた。

　人っ子一人いない港。沈みかける夕日が、海を赤く染め上げていた。海に面して建つ巨大な建物の前に、白銀のリムジンが滑り込んだ。
「本当に、ここでよろしいのですか？」運転手が言った。
「はい」桃子が言った。「私が荷物を受け取ったら、車は屋敷に帰してください」
「し、しかし……」
「構いません。私がよいと言っているのですから」
　桃子が降りると、潮の香りがつんと鼻を打った。運転手にトランクから取り出させたアタッシェケースを受け取った。
　波の他には、音一つたてるものがないほど閑散としていた。運転手は最後に、不安そうに桃子

の顔を見てから車を出した。
　次第に小さくなっていく車。それが米粒大になってから、桃子は腕時計に目をやった。千畝から指定された時刻まであと五分。ついに龍哉からの連絡はなかった。
　日陰のない場所だけに、海からの日差しが容赦なく桃子の肌に照りつけていた。桃子は肌が焼けるように熱く感じた。
――日焼け止め、塗ってくればよかったかな……
　実際、そのような時間はなかった。一秒でも遅れれば千畝が約束を取り消すため、桃子は指定された時間に余裕を持って到着している必要があった。
　だが指定の時刻を過ぎても、千畝は現れなかった。
――あれだけ遅れるなって言ってたのに……
　それでも桃子は重いアタッシェケースを手に、待った。ここで自分がさじを投げれば、竹内の人生を台無しにされてしまうという不安があった。
　暑さに耐えかね、桃子はアタッシェケースを下に置いた。予定の時刻を半時間過ぎたが、千畝は現れなかった。
　それから一五分ほど経ち、ようやく辺りが暗くなりかけたころ、遠くの方に車のヘッドライトを発見した。その光はだんだんと近づいてきて、桃子の待つ倉庫の前で止まった。
　その黒塗りの乗用車から、千畝が降りてきた。「待たせたわね」
「遅すぎるわ」桃子が言った。
「私は事故に遭わないよう、ゆっくり悠々と来たもの。私がどんなに遅れても、あんたは逃げられないものね」
　言って千畝は近づいてきた。
「あら？　だいぶ日焼けしたみたいね。私にとっては好都合だわ。あんたが白い肌でなくなれば、竹内が見向きしなくなるかもしれないし」
「そのためにここに呼んだのですか」
「さあね。どうかしら」千畝が桃子に手を差し伸べた。「余談はさておき、約束のものを渡してもらおうかしら」
　桃子は何も言わず、足下に置いてあったアタッシェケースを差し出した。
　受け取った千畝は、それを地面に置いた。「確認するわ。一枚でも足りなかったら承知しないから」
　千畝はしゃがみ、アタッシェケースの二つある爪を外した。途端、中から大量の新聞紙があふれ出た。
「なっ、何よこれ…!?」
　目を丸くして、桃子を見上げる千畝。
「あなたに渡す金なんか、一銭もないってこと」
　言って桃子は、普段の優雅な立ち居振る舞いからは想像でもできないほど俊敏な動きで、懐に忍ばせていたナイフを千畝の胸に突き刺した。
　千畝はよろめき、その場に倒れ伏した。

「お嬢様ーっ！」
　千畝の運転手が血相を変え、車から降りてきた。
　桃子は一目散に走り去った。

　それからどうやって家に着いたのか、覚えていない。ただ遠くから家の明かりを見たときは、思わず安堵の涙を流したほどだった。
　屋敷に入ると、玄関先に待ちかまえていた父親に怒鳴られた。
「こんな時間までどこをほっつき歩いていたんだ!?」
　私は腕時計に目をやった。十一時だった。あれから五時間ほど、私は独り夜の街をさまよっていたことになる。
「申し訳ございませんでした」
　頭を下げた。
「謝れと言っているのではない。何をしていたか聞いているのだ。隣町では物騒な事件が起こっているというのに、車は先に帰ってきてしまうし」
　大丈夫。私がその事件の犯人に襲われることはない。だけど、何と言い訳しようか。
「如月君と一緒にいました」
　私は咄嗟に、龍哉君の名前を出した。龍哉君には悪いけど、こう言えば父親の怒りがおさまると思っていたから。
「ほう。如月君とか」案の定、父親の表情が和らいだ。「彼と上手くやっているのだな？」
「はい。今日は一緒に映画を見てきました」
「そうか。必ずものにするのだぞ」
「はい」
「如月家は名誉ある官僚の家であるばかりか、浅水家の子孫を養子にしている。結ノ宮家と浅水家は長年の商売敵であったが、お前の縁組みにより、浅水家の財産まで手に入るとなれば、これほど面白いことはない」
「はい。わかっております」
　私は一礼して、父親の横を通り過ぎた。自分の部屋に向かって長い廊下を歩いていくと、後ろから呼び止められた。
「桃子」
　なんだろう？　返り血は拭いたし、血の付いた服は脱いだから、気づかれることはないと思うけど……
　私はおそるおそる振り返った。
　父親が言った。
「そう言えば、以前お前が口にしていた竹内などというのとは、もう別れただろうな？」
　よかった。これはこれでつらいけど。
　私は仕方なく「はい」と言った。これ以外の返答は決して許されないから。

「そうか。今後はどこの馬の骨とも知れぬやつとなどつき合うなよ」
　そう言って父親は去っていった。

　自分の部屋に入ると、机の上に千鶴からのメモを発見した。
　五時五分、如月さんから電話がありましたーー。メモにはそう書かれていた。
　私はメモをくしゃくしゃに丸め、ゴミ箱に捨てた。父親にみつからなくてよかった。
　着替えずにベッドに横になる。普段なら絶対しないけど、心身ともに疲れていたから。
　窓から月明かりが差していた。私はカーテンを開け、月を見てみた。
　五時五分か。私が車を降りてから十分後ぐらいか。龍哉君に相談できていれば、また別の結果もあったのかな……
　そう考えながら、私は目蓋を下ろした。深い眠りについたのは、それから間もなくのことだった。

　ドンドンと激しくドアを叩く音で目が覚めた。
「お嬢様、大変です」
　千鶴の声。
　うるさいなあ。もう少し寝かせてくれればいいのに。屋敷での生活は、たぶん今日が最後なんだから。
「お嬢様、開けてください。大変です」
　私はゆっくりベッドから起き上がった。時計を見ると、七時ちょうど。私は鍵を開けた。
　蒼白い顔をした千鶴が立っていた。
「警察の方がおみえです」
「そう。着替えてから行くと伝えて」
　言って、私はドアを閉めようとした。
「あの、お嬢様ーー」
　千鶴の声が聞こえ、私は直前でドアを閉めるのをやめた。
　もう一度ちゃんとドアを開け、千鶴の顔を見る。
「お嬢様、本当に……」
　そう私の顔を見つめながら言った。何かの間違いであってほしいと願う気持ちが伝わってきた。
　私は千鶴の手をとって、ほほ笑んだ。
「お世話になったわね。あなたの淹れてくれた紅茶、とってもおいしかったわ」
　それを聞いた千鶴は、その場に泣き崩れた。
「そんな、どうして桃子様が……」
　千鶴の目から、大粒の涙があふれる。
　千鶴に会うのも今日が最後だから、私はそんな主人思いの女中の顔を見据えて、

「私からの最後の命令です。身支度を調えてきますので、少々待たせておいてください」
「かしこまりました」
　深々と一礼し、千鶴は去っていった。

　同じころ、龍哉は独り食卓で朝食をとっていた。
――桃子、どうしたのかな？　昨日は連絡してこなかったし、登校前に一度、電話してみるか……
　龍哉がそう考えていると、電話が鳴った。廊下に出て電話を取ると、父親宛てだった。
　龍哉は父親を起こしてから、朝食を再開した。あと少しで食べ終わるというところで、電話を終えたらしい父親が、血相を変えてやってきた。
「……ん、何かあったのか？」
　紅茶のカップを片手に訊く龍哉。
「結ノ宮桃子に逮捕状が出た」
　龍哉は危うくカップを落としそうになった。
「な、なんでだよ？」
「昨日、隣町の港で事件があっただろ。東亜千畝が刺されたの」
「ああ。テレビでやってたな。朝刊にも出てる」
「まさかとは思ったが、悪い予感がして、捜査の動向を調査させていた。いま入った連絡によれば、すでに警察が桃子を被疑者として逮捕状を取ったそうだ」
「そ、そんな……」
「詳細は不明だが、とにかく行くぞ。桃子は結ノ宮財閥総裁の娘。本来であれば代用監獄に収容されるべき存在ではない。結ノ宮家に恩を売る絶好の機会だ。警察が身柄を確保する前に、検察に引き渡すぞ」
「了解」
　そう返事をして、龍哉は残りの紅茶を一気飲みした。
「お前は車の鍵を取ってこい」父親が食堂を出ながら言った。「私は地検と話をしてくる」
　次の瞬間、龍哉は三階へと続く階段を駆け上がっていた。
　息を切らせながら三階に到着した龍哉は、緋芽子の部屋のドアを叩いた。
「緋芽子、開けてくれ」
　必死にドアを叩くが、返事はない。
「起きてるか、緋芽子？」
　しばらくして、緋芽子の眠そうな声が聞こえてきた。
「う～ん。あと二十分」
「二十分もねてたら学校に遅れるだろ。緊急事態なんだ」
「へ？　緊急事態？」
　布団から這い出る音の後、中から鍵が開けられた。
　龍哉は寝間着姿の緋芽子に言った。
「朝早くわるいが、車の鍵を貸してくれ。桃子が警察に捕まりそうなんだ」
「えっ？」
　桃子は驚きながらも、龍哉のあまりの真剣さに、すぐ机の引き出しから鍵を出し、持ってきた。

「サンキュ」
　鍵を受け取った龍哉は、すぐに階段を駆け下りようとした。
「待って」緋芽子が呼び止めた。「私も行く」
「わかった。すぐ来てくれ」
　そう言いながら、龍哉は階段を下っていった。

　身支度を調え、龍哉は玄関を飛び出した。
　裏庭に出たが、まだ誰も来ていなかった。龍哉は車の鍵を開け、助手席に乗り込んだ。
　続いて父親がやってきて、運転席に乗り込んだ。
「緋芽子も来るって」龍哉が言った。
　言ったそばから、窓から緋芽子が走ってくるのが見えた。緋芽子が後部座席に滑り込み、発進する車。
「地検は身柄を引き受けるのか？」
　猛スピードで走る車の中、龍哉が言った。
「ああ。連れてきてほしいそうだ」父親が言った。
　車は一般の道路から高速道路に入った。アクセルを踏み込む父親。
「逮捕ってふつう、何時ごろなんだ？」龍哉が言った。
　視線を逸らさずに、父親が言う。
「通常逮捕の場合、ふつうは早朝だ。刑事訴訟法第二〇五条第二項に基づき、逮捕後は四十八時間以内に被害者を検察に送致しなければならない。地検と留置場を結ぶ護送車が早朝に巡回するため、四十八時間を最大限利用するため逮捕は早朝になる」
　龍哉は腕時計に目をやった。七時半だった。
「間に合うのか？」
「さあな」
「間に合わせてくれ」
　ギヤ比を変更し、アクセルを踏み込む父親。急激に速度が増し、龍哉の身体はシートに押しつけられた。
　運転席のタコメーターに目をやった。みるみる左に動く針。速度は一六〇キロを超えた。
　風を切って進む車。幸いなことに、道は混んでいなかった。
　しばらく進んでいくと、突如、運転席のスピーカーから電子音が鳴った。
「ピピ……　千メートル先、Hシステムです。制限速度八〇。自動減速を行います」
　自動でブレーキがかかり、徐々に速度を落とす車。
　父親が言った。
「高機能だな」
「コンピューター搭載なの」緋芽子が言った。
　減速しつつ、さらに進むと、またスピーカーから声が聞こえた。
「ピピ……　通過しました。通過速度七十六。制限速度内」

父親が再びアクセルを踏むまでもなく、自動でアクセルが動いた。一気に速度を増す車。
「速度、戻します」
スピーカーから声が聞こえる。
「危ねえっ。緋芽子、どうやってとめるんだ？」
父親が言った。
「そこ。画面に触れて」
緋芽子は運転席前方のディスプレイを指さした。
龍哉は横から手を伸ばし、「自動・手動　切り替え」と表示されたボタンを押した。
速度が調整できるようになった。
「緋芽子がいてよかった」龍哉がほっと溜息をついた。「すごい車だな、これ……」
「お父さん、だいぶ乗り回してたからね……」苦笑いする緋芽子。
「ほかにどんな機能があるんだ？」龍哉が言った。
「自動で目的地に行く機能とか、操縦機で無線操縦できる機能とか、ほかにもいろいろ」
「すごすぎ……」
再び一六〇キロを超した車。
しばらく行ったところで、再びスピカーから声が聞こえた。
「ピピ……　緊急車両のレーダーを補足。距離一〇〇メートル。自動減速を行います」
父親はディスプレイに手をやり、自動減速を解除した。
「ど、どうして――」龍哉が言った。
「間に合わない」
バックミラーに目をやった龍哉。後ろから猛スピードでパトカーが接近していた。
サイレンが鳴った。
無言でアクセルを踏み込む父親。メーターの針が、一気に左に振れた。
一瞬にして、パトカーを引き離す。
「料金所で追いつかれるんじゃ……」不安そうに龍哉が言った。
運転に集中したいのか、父親は何も言わずにハンドルを握っていた。
やがて料金所の看板が見えてきた。父親は急ブレーキをかけ、路肩に車を止めた。
近づいてくるサイレンの音。
「どうするんだよ」龍哉が言った。
「落ち着け」
父親は車内電話を取り上げ、手早く番号を入力した。
「……ああ。うん。私の車だ。追跡を終了してくれ」
受話器を置く父親。
サイレンの音が遠ざかっていった。
すぐに路肩から発進し、料金所の列に並ぶ。一般道に降りた後も、かなりの速度で走り続けた。

　応接間には、父親と二人の刑事がいた。父親は私が来るなり椅子から立ち上がり、私の両肩をつかんで言った。
「……殺人未遂だそうだ。本当に、お前がやったのか？」
　未遂ということは、まだ死亡していないのか。
　無言で頷く私。
　刑事の一人が近づいてきた。
「それでは、手を」
　手錠を出し、私の手にかけようとした。
「待ってくれ」父親が言った。「最後に部屋で娘と話をさせてくれ」
「困りますね。逮捕状が出ているのですから」刑事が言った。
「すぐ済ませる」
「まあいいじゃないか」別の刑事が言った。「手短に頼みますよ」
「逃亡のおそれがあるのでは？」
「なに、屋敷の後ろにも刑事が張り込んでいる。逃げられるはずがない」
　私は父親に連れられ、父親の部屋に入った。事情を説明するように言われ、説明した。
　全てを知った父親が言った。
「どこの馬の骨とも知れぬ男が、そんなに愛しいか」
　私は頷いた。
「そんな男のどこに、お前が身を挺してでも守る価値がある。見捨てておけばよかったものを」
「見捨てるわけにはいきませんでした」
「卑しい者がどうなろうと、お前の知ったことではない。高貴でない者など、見捨てられるだけの運命なのだ」
「父上はどうしてそう竹内君を卑下なさるのですか？　彼は決して裕福な家の生まれではないが、きわめて貧しくも――」
「考えてもみろ。お前も、浅水家の跡継ぎも、その千畝というのもみな女だ。女を跡継ぎにできない家など上流ではないのだ。私がお前を子供にするのにどれだけ苦労したことか。にもかかわらず、お前はそんな男のために……」
「私を産むのに、苦労なさったのですか？」
　そんな話は聞いたことがなかった。
「お前には二人の兄がいた」父親が言った。
　なっ……
「二人とも産まれてすぐ、遠い親戚にやった。今ごろは自分が結ノ宮家の生まれということも知らず、育っているだろう」
　そ、そんな……聞いてない……
「それから養子を取った。続けて三人の出産は母親にも負担となる上、また女でない可能性がある。考えた末、私が海外の支社を転々としていたころに知り合った外国の老夫婦から、事故で

両親を失った幼い孫娘を引き取ったのだ」
「……そうでしたか。しかしその子は死に、新たに私が産まれることになったと？」
「いいや、死んでなどいない。現にその娘は今も私の前で、私と話している」
　えっ、今なんと言っただろうか？
「考えても見ろ。青い目に、金色の髪をした日本人がいると思うか？」
　確かに不思議だった。子供のころから私の髪は金色で、目は青色。それでも周りからうらやましがられたり、ちやほやされたりして、私は特にそのことを両親に問いただすことはしなかった。
「今までお前が気づかないことが不思議だった。お前は、私がフランス出張中に引き取った、両親を失った娘なのだ。今もお前が祖国の文化や言語に興味を持つのはそのためだろう」
「私が幼いころ、父上についてフランスに行っていたというのは……」
「あれは嘘だ。お前に、私に引き取られる以前の記憶が残っているとも限らなかったからな。後々、あの頃の記憶は何かと問われては困ると思ってな」
　そうだったのか。私は、ここの娘ではなかったのか。
「そんなお前を我が子同然にかわいがってきたというのに、この仕打ちか」
　私は政略結婚の道具にしようとしていたのは、誰だったか。
「お前が二度と結ノ宮の名を名乗らぬよう、真実を告げてやったのだ。お前は家名を汚した。二度と戻ってくるな」
　言い終わるのを待たず、私は部屋を飛び出していた。
　あふれる涙で視界が悪く、廊下で何度も壁にぶつかりそうになりながらも、なんとか応接間の前までたどり着くことができた。
　ドアを開ける前に、ハンカチで涙を拭いた。深呼吸をし、覚悟を決めてドアを開けた。
　部屋に入ると、待ちかまえていた刑事が私に手錠をかけた。金属の冷たさが手首にしみた。
　ーーがしゃん。
　ちょっと手を動かしたら、手錠が落ちた。手が細かったので、輪っかをくぐり抜けてしまったのだった。
　刑事は手錠を拾い上げ、代わりに縄で私の腕を縛った。その縄の端をひっぱり、私を廊下へ連れ出した。
　刑事に連れられ、玄関に出る。そこには千鶴がいた。
　千鶴は何も言わず、靴を履かせてくれた。気遣いのある千鶴らしい見送りだった。
　玄関を出ると、前庭に続く十数段の階段がある。刑事に縄を引かれ、そこを降りる。
　一歩一歩。階段を下りるたびに、消えていくーー私の地位、名誉、財産、約束された結ノ宮財閥総裁の座明るい未来龍哉との結婚
　最後の一段を下りたとき、私は目の前が真っ暗になり、倒れそうになった。刑事が脇から身体を抱え、連れて行こうとした。
　そのときふと、庭に植えていたクロッカスのことを思い出した。
「待って」

　叫んだ。
「今さらなんだ？」刑事が睨む。
「花……」
　言葉につまった。私は咲き乱れるクロッカスの花をどうしようというのだろう？　一本だけ折って持っていこうというのか。押し花にでもしようというのか。……そんな時間はないのに。
「こら、行くぞ」
　刑事に強引に縄を引かれ、ずるずる引きずられる。行く先には、刑事が乗ってきたと思われる一台の車があった。
　そこまであと十数メートルというとき、公道から一台の車が、閉ざされていた結ノ宮領の高い門を突き破って入ってきた。急ブレーキをかけ、私と元からあった自動車との間に停車する。
　何という荒っぽい運転だろうか。見たところ高級車なのに、これでは痛んでしまうだろう。この車は確か、イタリア製高級車のランボルギーニーー
　私の脳裏を、昨日の図書室での龍哉の言葉が過(よ)ぎった。
「龍哉君っーー」
　私は思わず叫んでいた。
　その呼び声に答えるように、ランボルギーニ特有の羽のようなドアが開き、龍哉が降りてきた。
「待たせたな。桃子」
　私は縄をかけられていることも忘れ、走り出そうとしたが動けなかった。
　近づいてきた龍哉が、私の手にかけられた縄を見て言った。
「かわいそうに」
　刑事が怒鳴った。「なんだお前は！　そもそもさっきのは道路交通法違反だろ！」
　龍哉は刑事を見返して、
「いま説明する」
　龍哉の乗ってきた車から、続いて大人の人が降りてきた。
「おい龍哉、さっきのでコンピューターが壊れたぞ。急がせるからだ。まったく」
「わるいな。修理代は今月の小遣いから引いてくれ」
「高機能だったからな。一ヶ月分の小遣いでは足りないかもしれん」
「そりゃないぜ……」
　どうやら龍哉の父親らしかった。
　父親が刑事に近づくと、刑事はあわてて敬礼した。
「結ノ宮桃子は著名人の娘。慣例に則り、検察に身柄を引き渡す」
「はっ」
「移送は私が引き受ける」
　龍哉君の父親は刑事から縄を受け取ると、外してくれた。
「ありがとうございます」
　両手が自由になった私は、龍哉を抱きしめた。龍哉は後ろに回した手で、私の頭をなでてく

れた。
「遅くなってわるかった」
「いいの。龍哉君が来てくれて、よかった」
　涙が頬を伝った。
「残念ながら、いつまでもこうしてられない。行こう」
　私は龍哉に手を引かれ、車のところまでやってきた。
　ガラス越しに見える妹の姿。緋芽子は車から降り、助手席に移った。私は龍哉とともに後部座席に乗り込んだ。
　最後に父親が乗り込み、車を発進させた。
　龍哉が言うことには、現在、千畝は意識不明の重体で入院しているという。担当医の話では、容態は悪く、今夜が峠だという。
　私はうつむいて、「そう」と言った。龍哉は特に言及しなかった。
　私は犯行の経緯を話した。それから心を決めて、ついさっき父親から告げられたことを話した。
　涙ながらに語る私の頭を、龍哉はずっとなでていてくれた。全て聞き終わると「そうか。ちなみに俺は外人女性萌えだがな」と言った。
　車が着くまで、私は龍哉の胸に顔をうずめて泣いていた。龍哉に背中をさすられながら。

　勾留が始まってから、桃子は検察に対し、千畝の竹内に対する誣告を主張していた。だがその甲斐なく竹内は起訴され、一審で有罪判決を受けた。
　龍哉は桃子にそのことを告げに行った。
　強化ガラスの板を挟んで、桃子と向かい合う。龍哉は桃子が勾留されてからというもの、ほぼ毎日のように面会に訪れていた。
　勾留から既に六ヶ月が経とうとしていた。龍哉には桃子がやつれているように思われた。
　竹内の有罪を告げると、桃子は大粒の涙を流した。龍哉はそばに行ってなぐさめてやりたかったが、それは叶わなかった。厚いガラスの板が、二人の接触を阻んでいた。
「辛いとは思うが、もう一つ悪い知らせがある。いや、いい知らせとも言えるが……」
　ガラスの板越しに、龍哉が言った。
「何ですか？」
　涙を湛えた目で龍哉を見る桃子。
「千畝が意識を取り戻した」
「どうして」桃子の目から大粒の涙があふれる。「そんなことって……」
「これでお前が殺人罪に問われる可能性はなくなった」
「竹内君をかばいたい一心だったのに。ちゃんと刺したはずなのに。知らないうちに手加減してたなんて……」
「悪がそう簡単に死んだら悪ではないからな。お前の問題じゃないと思うぞ」
「竹内君をあんな目に遭わせておいて、これからものうのうと生きていけるなんて……」
「その竹内だけどな……」
　龍哉はそこまで言って、思いとどまった。真実を告げるべきか、迷っていた。
「竹内君が、どうかしたの？」
　不安そうな桃子の声。
　それを聞いた龍哉は、ますます次の言葉を発するのがためらわれた。
「ねえ、竹内君がどうしたの？　何かあったの？　まさか、自殺とか……」
　より一層、深刻さを増す桃子の声。
　意を決して、龍哉が言った。
「自殺すべきだ、あんなやつ」
　桃子は目を見開いた。
「どうしてそんな……」
「竹内と千畝は内通していた。お前から慰謝料をだまし取るためにな」
「ありえないわ。どうしてそんなこと……」
「父親に無理言って、千畝と竹内の携帯電話の通信記録を差し押さえてもらったんだ。二人がやりとりしていたメールの内容から、お前が竹内と知り合ったと言っていた頃の二ヶ月前から計画がなされていたことが判明した」
「嘘よ！」桃子が声を上げた。「信じられないわ。竹内君はそんな人じゃないもの」
　龍哉は鞄から紙の束を取り出し、ガラスに当てた。

「当該箇所のコピーだ。竹内の取り分は慰謝料の三分の二の予定だったな」
「嘘よ」桃子は目を逸らした。「ありえないわ。何かの間違いよ。竹内君は……」
　桃子が肩で息をしていることに、龍哉は気づいた。
「落ち着け、桃子」
　桃子はわっとせきを切ったように泣き出した。
　面会時間が終わるまで、龍哉は桃子のそばにいた。

二日後。学校から龍哉が帰宅すると、緋芽子が深刻そうな顔で出迎えた。
「お父さんから、留守番電話にメッセージが……」
緋芽子が言った。
「どうしたって？」
「桃子さん、自殺したって」
龍哉が靴を脱ぎながら言った。
「そうか」
廊下に上がり、自分の部屋に続く階段に向かう。
緋芽子が呼び止めた。
「お兄ちゃん」
振り返る龍哉。
緋芽子が龍哉を見つめて言った。
「……死ぬって、わかってたんじゃないの？　どうしてとめなかったの？」
「俺に、桃子の苦しみをこれ以上長引かせる権利はない」
言って、歩き出そうとした龍哉。
「好きだったんでしょ？　桃子さんのこと」緋芽子が言った。「私、ずっと前から知ってた。二年生のころ、お兄ちゃんと桃子さんとが一緒にいるの見て、うらやましく思えたほどだった」
「もう済んだことだ」龍哉が言った。「それに、俺にはお前がいるだろ」
龍哉は階段を上ろうとした。
「待って」
緋芽子が新聞を手渡した。夕刊の社会面、結ノ宮財閥が長女の死亡を受け、新たに東亜グループ総裁の娘、東亜千畝氏を養子とした上で、同氏を次期総裁に内定したと報じる記事が載っていた。
龍哉は新聞を返した。
「どうしてなの？　自分の娘を死に追いやった張本人を総裁にするなんて」
「世の中、不正や汚職など、汚いことをしなければ手に入らない権力や財産もある。結ノ宮家はそうやって今の地位を築いてきた。千畝はその能力を買われたんだろ」
「なにも桃子さんが死んだ日に発表することないのに」
「いちおう死ぬまで待ったんだから、多少の配慮はあったんだろ」
「だけど、こんなのひどすぎるよ……」
「千畝と竹内の通謀を示す記録は出てきたが、いったん竹内を痴漢で起訴し、有罪が確定した以上、検察が裁判のやり直しを求ることはないな。痴漢に遭ったという主張を千畝が撤回する様子もないし、竹内は見捨てられたな」
「竹内は自業自得として、千畝はずるすぎるわよ。けがは完治したし、結果的には結ノ宮財閥の次期総裁になっちゃったし、どうしてそんなに都合よく……」
「ひょっとしたら、千畝は最初から結ノ宮財閥の乗っ取りを計画し、竹内を利用したのかもな」
「それって、どういうこと？」

「二人のメールの記録によれば、千畝が桃子に請求する慰謝料は百万円となっていた。だが桃子が言うには、実際に請求された金額は一億円。いくら桃子が結ノ宮財閥総裁の娘とはいえ、当日中には決して支払えない額だ。東亜グループ総裁の娘である千畝も、それくらいわかっていただろう」
「じゃあ、千畝はもしかして――」
「桃子を失脚させるには、警察に捕まらせるのが一番だ。桃子がダガーナイフのような危険物を所持していないことは明らかだからな。うまく急所を外せば、死ぬ可能性は低い。実際、桃子が使ったのは殺傷能力の低い果物ナイフだった」
　目を見張る緋芽子。
　龍哉が続けた。
「跡継ぎの桃子を失った結ノ宮財閥は、新たな跡継ぎを探さざるを得えない。仇とはいえ、そのずる賢さを買って、新たに千畝を跡継ぎにすることにした。――全ては千畝の計画通りだったのかもな」
　言って龍哉は拳で壁を殴った。ダンッという音が家中に響く。
　突然の出来事に戸惑う緋芽子。
　龍哉は壁に手をつき、うつむいて言った。
「俺としたことがうかつだった。あんな小娘の芝居に騙されるとはな」龍哉の目から涙がこぼれた。「始めて桃子が千畝と会ったとき、俺が気づいていれば……」

エピローグ

三ヶ月後、龍哉は結ノ宮領に向かう道を歩いていた。

約束があるわけでもかった。目的があるわけでもなかった。ただ桃子のことが忘れられず、気づけばそこに足が向かっていた。

千畝はすでに退院し、結ノ宮家の新たな長女として生活を始めているという。

電車に揺られ、駅を出て歩く。やがて一面に広がる広大な敷地が目に入った。

一見して、龍哉は違和感を覚えた。

去年、敷地の周りに咲き乱れていた白いクロッカスの花はもうなかった。代わりに咲いていたのは、赤いバラの花。

どこかで千畝の笑い声がするようだった。